

尾崎三良と徳富蘆峰

会員 御手洗一而

私は調査と読書の間に、佐伯地方に關係するものを、索引を作つて整理しているが、その中から、現在に近い明治と大正時代をとり上げて二題紹介したい。原文は日記の一節であるが、皆さんにはなつかしく懐古され、若い人は、佐伯を知る上に結構面白くて樂しい讀物になる。

（其の二）

尾崎三良自叙略伝

（中略）

「尾崎三良は明治政府の高官で、明治十八年三月十二日御用有之九州各县、被差遣候事」の辞令さうす。九州各县を巡回している。その目的は、国会開設に当たり、「鬼も鼠も、僻遠地の人々終済の情態を審査する必要あり」としている。

「六月一日 大分港より汽船三光丸に搭り、白井・佐伯巡視の途に上る。三光丸は二百七十石の小船なり。四時大分港を発し、佐賀ノ瀬戸一泊。

翌二日前三時所を発し、白井・伊予の八幡浜及伊宇和島等を経て、午後九時に佐伯着。白井より佐伯に至る陸路僅かに八里有ればも峻険難路なり。故に旅客は皆海路に由る。海路僅かに十余里、速く遙き船ても約三時間に至るべし。汽船は伊予國八幡浜、守和島以寄港、四十五六里の迂回なり。旅客皆不平を鳴ら

す。佐伯より巡回船名本船へ運へに来る。共に上陸、巡回先導にて、駕東凡そ三十町にして船頭折衝賃佐物嶺太郎は投宿へ旅店にあらず、夜十時過なり。佐伯部長、警部未る。深更なるも皆務めて面会す。」

先ず且ご苦勞様と言いたい。白井から佐伯まで、八幡浜、宇和島と總て佐伯とは、旅客がどのようになふと並べたか想像に余りある。ただし明治の高官をもつてしても、意又如くならなかつて良らしい。貴重車一便だつたに違ひない。してみると、定期船はいつごろから就航したのであるか。明治十八年が交通事情を知る上で、貴重な資料である。その頃、佐伯にはすでに人力車があつた。

「佐伯野は元毛利伊勢守高謙の領地にて、俗に矢筈毛利と云ひ祿二万石。小祿の割には士族多く、矢野文雄、藤田茂吉は佐伯藩士なり。郡長等の案内にて郵便所・裁判所・学校等巡視例の通り。佐伯地方に一種他に異風俗あり。二三男といへども妻子にゆることも別家十ることもなし。皆家に在つて各々妻を持ち子孫繁殖す。其代り戸主の権力は殆んど君主專制にして、他の家族は悉く奴隸なり、所謂家の子弟党なり。一家は其家族の勞働より生ずる收入を以て家計を立つ。一年日日の休暇の外、一日も休むべからず。各自の食料、衣服は皆自分で。又各自休日及び夜業を以て私有の財産を作る。此習慣は蒲江村に今猶最も嚴重に行かれ、其故か闇村人民の勉強耐忍、曾て他村の反感がある所以して、各戸富饒なりと云ふ。」

旧藩士族及び明治に至つて旧藩士の時代は、佐伯毛利藩と通称矢筈毛利と呼びれ、士族の多かつたことが指摘

されてゐる。これについては藩祖高政公と家臣団について、小説を書きたいが、高政が秀吉の近習として重宝される間、清正や正則らの武断派はすでに軍團を任せられ、石田三成ら文治派は能吏として才覚をあらわす。譜代の家臣をもたない高政は、その運びをとり度を止め、家臣をとり立て、独立で軍團を組織する。そのため、同胞の清正や正則は正敵する家臣を集めようとした伝統的有名戦士として小林の割に家臣が多くなつた。

当時矢野龍溪、幕田茂吉は中央で著名であり、その意味で豊後佐伯藩は知らぬ者かなかつた。

藩主に代表される封建制度の風俗及、誰の報告によるものか興味ある一文である。そう言あれど、亡父の生き方にについてそのような企画もすら無く、民俗学から歴史を研究する一つの視点にある。在方と浦方の比較についても研究課題の一つであろう。

「佐伯は三、四日の兩日滞在の間所々見物、櫻島、接客等に忙しく、四日は佐伯を辞し大分は帰らんとするも汽船の便二、三日なしと云ふ。乃ち小舟一隻をやとい佐伯番亘川より川口に下り、所々巡検して大分は帰らんとす。舟子三人順風に逢へば帆を揚げ、風便ならざれば三人間断なく櫻島を盪し、従者三名、萬官一名、或は官吏の從ふこともあり、予と共に五、六名なり。津井村を経て細代村に達す。同村佐長坂本富次方に投宿。

(生) 津井村から細井、大分に向かう途中に細代浦と

いうのはない。恐らく細代浦のことだらう。

五日は細代を発し元の小舟に駕す。然れども此度日本子四人でて間断なく櫻島盪す。二小岬を迂回して白井に達す。凡そ五時間を要す。(以下略)

尾崎三良の揮毫が、佐伯のどこかに残存しているかも知れない。また当時の船使の様子がよくわかる。汽船は網島と別府、あるいは大阪行きと何かの本で読んだことがあるが、少し分間の事の大変と思う。船頭所を發つて網代に一泊、五時開港の件着。私はこの日記から「主として明治時代の交通網を探り、水文四人にかける船の速度を概測し、海賊史を書く資料として参考にした。

（其の二） 烟霞勝遊記 慶富猪一郎著

(上巻)

これは、講先生方おなじみの蘇峰學人の「九州遊記」中の一節であるが、當今、蘇峰翁の著書も暮間寄居に探し得なくなつたので、あえて資料として書きとめることにした。

「白井から日躰々遙道多し。但だ山間に天然の紫藤花、今や繁開。山腹隨處、相薦類々植う。夏蜜柑累々として正に熟す。洞門を出づれば、小湾に出て、小灣と過ぐれば、洞門に入る。

佐伯にて及、小田部町長、其他多數有志の方々に伴はれて、直ちに常盤旅館に入る。隣て尾間屋よりの打合せありたる由にて、已に投網船の準備出来たりとの事をれば、午餐の筈を授じて赴く。」

まずは簡潔にして名調子の文章である。

小田部町長。かつかしい名前には驚く者が、記憶にない。何しろ、この学人日記、大正十一年四月二十六日午前六時半と奥書きあり、小生懶怠ながらまだこの世にあらず。投網船とは又風流にして、最上ア馳走なるも果た

して公害の今や如何。

「佐伯は予に於ては、思い出少くからず、矢野龍溪翁は、予が少壯時代、最も誇張を厚くしたる先輩の一人也。岡木田兄弟、尾関兄弟の如きは、云ふ迄もなく、故秋月旅館の如きも、議会に於て改革の隣に座を占め、屡々乾燥する議事上に、文芸の事と談じたる縁あり。

「旧藩主毛利高範子の如き、亦太肥後出身の方にして、多年相識の間板也。而して現在京都で嘗て勢り、此地に久しく旅館を営りたる、金子正道君の如きも、末右親友の一人也。」

「流石に、大正時代のしかも蘇峰浮城人の日記となると、わざらか大先輩の寒名がほんくと飛び出して來つかしい。勿論誰一人として私はお会いしたこと及びない。私にとって大正時代は、すでに昔の歴史の範疇に入るものであらうか。不思議な気持ちがする。」

「此地も二十三日は、強風雨にてありたる由にて、风尚且餘懸念止めず、川亦を濁る。投網には決して船適と云ふ可からず。然も六艘の網船は、一艦隊を有して寄せ打をなす。別に料理船あり。主客一座の伝馬船あり。合せて八艘、流に沿うて下る。所養は鱈（ハタ）、鰯（ホウズ）、黒鯛、ヒイゴ、ウクヒの類にして、鰯（ホウズ）に其の七分を占め、中には黒鯛の一尺余のもの、又太鯛（ヒラマサ）二尾を得たり。実は主人側でも、意外な好獲物に驚き、左石が如し。臉（チヂミ）と有し、湯となし一湯とは吸物のこと（ヒラマサ）となし、飽迄餌口を満足せしめ走り。我が老妻は東京にある三十餘年、未だ一回も玉川鮎鰯立見すとて屡々争ひ之を促がせり。然も今や此の鰯鰯を見て、鮎鰯催促權權却き自狀せり。佐伯所有志請景の憲心、大なりと云ふ可し。」

書ぐほどに思ふす生ぬるとの及、佳きかず佐伯、あが舜坐と言ひたくなる。近々六十年の昔にもう一度度せまいものか。佐伯湾のきれいな海とともに、老夫婦の感激が、「鮎鰯催促權權却き自狀せり」と一行で表現しつくされている。

「佐伯湾及莫留五里、深入七里、無數の小港湾、島嶼此中にあり。番豆川及寢川三派となりて之に注ぐ。時晴櫻花の好時節、水は波瀾を没して浩蕩たり。小船龜が始く、四邊の風物、人をして水滸伝中院小七を憶はしむ。船正橋下に繋ぎ、市街を見物し、城跡の麓に勢ひ三の丸の城門を過ぎ、旧藩主の邸を見、士族屋敷の現存するものを見、宝永の津波に懲りて、積元在りと云ふ老松の並木の中を過ぎ、帰宿したるは、八時前にしてありき。」

「番豆川三派が注ぐ佐伯湾の説明と風物の表現、まして老松並木の由来など、いくら蘇峰でもふつうの旅へでこなほ書けまい。案内役の見事さに敬意を表したい。説明役は歴史の人と観んだ。」

「四月二十六日、此行第一の好天氣。但だ予は昨夜未熟あり、気分甚を勝れず。」

「八時頃寝き力めて、諸有志に誇はれ、旧藩主の菩提所・養貧寺に赴く。寺は鶴谷城趾之下にあり。打ち明けて云へば、佐伯に過ぎたるも力の一本石心し。種々の幸室を見る。其中には鼎州和尚が、旧尾張侯徳川慶服より贈られたる、蔵絵文台、硯箱、及び錦の帳幕等あり。鼎州和尚は當寺の先住にして、幕政の木浦、幕長戰率に際し身を挿んで、その外交談判に齋りたる一人也。幕軍總督尾張侯が、彼を徳としめたる也知る可し。斯くて何時之間にやら、櫻花の葉落せらば、予は

疾を力めて十六、七枚と書せり。斯くて毛利家の墳墓、及び秋月橋間翁の碑を拝して帰り故

蘇峰翁、「解が佐伯の美味を食し過ぎたか」

養賢寺は佐伯の舊る寺、鼎州和尚の説も充分聞いている。幕末から明治の維新が起つたに連い合ひ。何處も養賢は佐伯の近世史が要約されている。三百年の歴史の大要を考る時は、城山に登つて望観し、個々の事象は、

養賢寺の山門をくぐり、歷代毛利公の墓提を弔うがよい。

何外教えられた所がある。

「午後一時半、停車場に向ふ。小田部町長、其他有志相送る。佐伯は於ける有志諸君へ厚意、謝す可き也。此からの汽車は玩具同様の小汽車也。人々にして三十年前のお式汽車に乗る、気分勝れず、腰を曲げて車

上に駆す。線路は築して深谷の間を上る。一時間足らずして、重岡に至れば、渡辺民三郎辰、友次杉山富蔵

県知事の代表者等の歓迎あり。此より自動車にて延岡

へ赴く。時に三時半頃であります」

「停車場」がなつかしい。當時大正十二年、蘇峰の見た日豊線（豊州線）は、三十年前的小汽車であつた。蘇峰のいう三十年前とは、明治二十九年、六年頃である。どの程度の小汽車か、ちよつと想像もしにくいが、重岡から日向へ通じる日豊線は、確かに開通が大正十二年であつたから、余程小型だつたに違ひない。

ついでに重岡からの自動車搭乗記を述しておく。

「豫て此間の道路の険悪を聞き、且つ前日の暴風雨のために、道路破損し、不通の評判を聞き居たれど、予等は備々乎として、佐伯を発しがり、然るに米りて見れば、謂い方程でなし。併し湖石に、萬層の山脈中

を縦うて行く峠路にして、且つ鐵道道路の工事未中す。何れにしても、機械体操のやうへば也。途中蘇峰誌閣、溪水而後は均及らず、尚碧を湛ふ。而して激して湍となり、掛りて瀑布とする。亦た奇觀ならずとせず。途中下車の己も可からざるは、宗太郎峰と北川橋のみ」

景色反よかつたが、日向越えは難所であつたに違ない。當時鉄道工事中で、又宗太郎峰は車を降りてゐる。道路工事中か、當時の自動車では馬力不足であつたのか、運転ではないが、大正十一年頃の開発状況が彷彿とする。僅々進歩が早過ぎるのか。六十年の歳月が早過ぎるのか、すでにこれが日記その史料へ仲間入りをしつつある

（上）

志賀島の金印塔孤

この桂月元年北九州研修旅行
漢　　之際　買ひた金印の印影の模
委嘱　　写べておきがたつて、不
因正　　完全に写さねばならぬもの。
　　（本物はござりハズ）



（上）

名もない農民が、またもなし所から落

極したといふのがうれしい。なぜかまら

樂学の者でも古い歴史にあづかる機会があつたる

郷土の歴史も、古い世界史的意義をもつてゐる。併つて、朝鮮史や中國史へ勉強が必要ということを教へた。

（上）